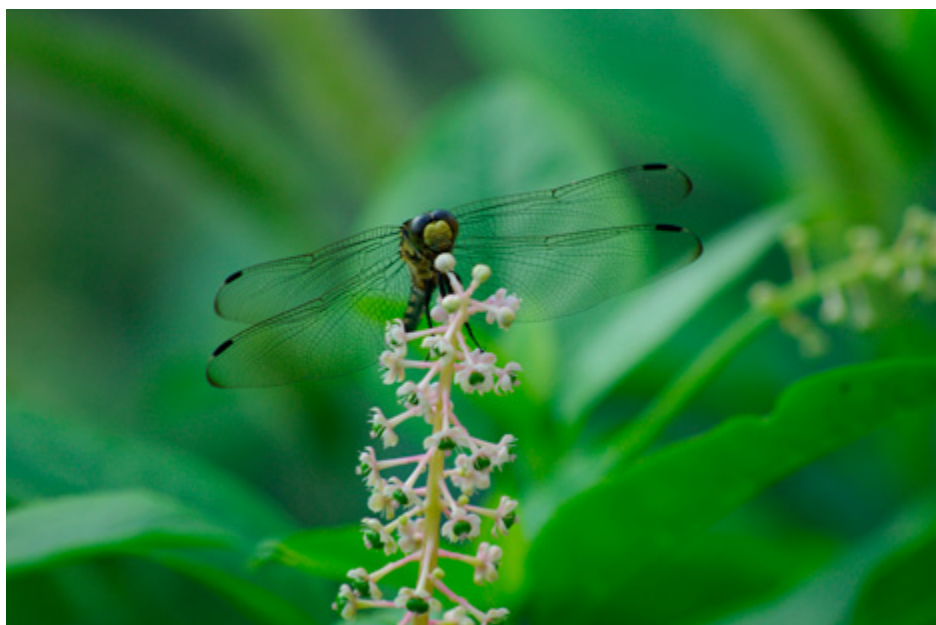


あを



2014



遠きミャンマー



峰雲に翼のふれしメコン河

佐藤喜孝

あそ

八月

鳳仙花

佐藤喜孝

東京

父の日の口をひらきてすぐとちて

ごきぶりの昆虫でゐる森の中

あをしぐれ通りすがりのみちのおく

冷房裡原發廢爐案を練る

雨の日の開いてゐる窓のうぜん花

おのが影夜どほしさがし熱帯魚

鳳仙花うそうそどきの子の名呼ぶ



原爆忌言ひ出す母は背をのびし喜久恵

胸のここに涙たまりをり原爆忌

原爆の日ゴミの袋を出してをり

原爆の日一本の棒喉にあり

書を閉ちて原爆の日と思ひけり

原爆忌のおの水を持ち歩く

夕立はものの弾みかヒロシマ忌

平安を祈りつつける原爆忌

今も尚悪夢の如き原爆忌

新たなる核への不安原爆の日

夏深し原爆の日の目裏に

鴉等も姿を見せず原爆の日

ロザリオを心の妻と長崎忌

多枝子

米子

一郎

友七

のりこ

尚子

今年の八月六日九日は大型台風が接近

中に行はれた。故人となられた方々の原

爆に関する句を読んだ。喜久恵さんは五

句発表されてゐた。わたしが『原爆忌』

に横槍を入れていたからか後年の三句は

『原爆の日』とされてゐた。

虹

長崎桂子

三重

夕虹や鈴鹿山脈近付ける

夕虹に常の用事を忘れたり

草を抜く六月の香に噎せるかな

風暴れ流れ速まる梅雨の入

緑雨して産土の杜厳めしげ

久に会ふ友と談笑夏満月

父の日やあれこれ偲ぶ一日とす

蘇

鉄

森

理

和

東京

雑木林ここに居ますと栗の花

浜木綿や南へ向けて舵を切る

大窓を緑が蔽ふパン工房

好ましき皺よる僧侶夏衣

野茨の四方へ伸びをり沢の音

勇ましく蘇鉄の新芽いざ出陣

葡萄の芽制服靴十二歳

今年は「梅雨に入りました」との
ニュースがあつた其の日から、台風が
今通過している様な風雨の激しさが二
日間も続き、六月の雨量の七十パーセ
ント降ったとの事。天候の恐ろしさを
つくづく感じました。

其の三日前に新しい簾に変えたの
に巻き上げるのを忘れていて、その簾
がすっかり駄目になってしまい、風の
威力に平伏しました。

列島各地からの雨量による被害の
ニュースは、お気の毒なニュースが多
くて、気が滅入ります。

どうか被害が最小で済みます様に、
心よりお祈りして居ります。



☆

山莊慶子

埼玉

幼子の髪切り揃へ梅雨に入る

夫逝きてひととせ巡り白紫陽花

連なりし青きトマトや屋根の下

向日葵の蕾の中や小虫住む

いつの間に付きし毛虫や鋭かり

夏の朝足どり重き少女かな

夏の夕手漕ぎ小舟の幾艘も

吉成美代子

東京

つばくらめ去年の軒に帰り来る

掘り起こす土の湿りて春の風

花屋みな軒をはみ出す四月かな

ゆるやかな坂のぼりきり草若葉

遠まきに人待つ雀額の花

みな同じ吊り下げ名札梅雨晴間

蟻走りだんご虫出で挟虫



☆

吉弘恭子

東京

垂れ籠める雲にのりたる石鹼玉

雲を追ふしゃぼんだまの彩さやと

てのひらに春蚊をいれる少しかたい

春種を早く出てねと子のゑがほ

蟻穴を出でて尻尾に定住す

夏休み赤子のやうな中国語

森林の色湯に夏の身をゆだね

☆

赤座典子

東京

老鶯やコロラトウーラの澄渡る

能舞台跡も其処此処木下闇

農耕車優先道路柿若葉

一瞬の姉さん被り風涼し

古民家や島の栄螺のスパゲティ

赤みずのとろろ汁めく夏料理

杉玉やきらきら並ぶ冷し酒

寛容になる。常の生活では特に使わなくとも普通の生活は成り立つ。しかし何かことが起きた時にこの言葉は何故か重要になる。

私などは典型的な物事自分中心にどうしてもなってしまう。自分に不利なことは許し難く思う。世の事もこれにあてはまる。自分中心から（自国中心から）他を思いやる心が大きく心に生まれたならば戦いは少し和らぐのではないだろうか。自分大切・自国大切から万民たいせつに生まれ変われるといいなあとおもっている。自分含めて。

そろそろ人間皆争い（思想・宗教の違い）に寛容になる時期なのではないだろうか。とひとり密かに思っている。私が生きている間は無理かもしれない。が若い人達には考えられないくらい賢い人たちが多い。いつも人の事を慮る人々が周りを埋めつくされている事を雲の上から見たものだ。絶対見るぞー!!。

我が家の状況の変化で、車も変える事となり、佐渡を訪れることになった。年四月に就航した大型カーフェリーは設備も豪華で、二時間半をゆつたりと過ごすことが出来た。鵜が大量に並走し、スナック菓子投げると上手に空中で捉えるので乗客は皆大喜びで投げていた。両津港に着く頃には、鵜の背中の柄が黒っぽく変わっていた！本州よりも涼しい風が吹き渡りからりとして心地よかった。

島という風土のせいか、歴史文化が風化されず、奥床しい雰囲気、随所に感じられた。外壁に、船板や船釘を使った建物の並ぶ一角は、江戸時代ヘタイムスリップした気分。島の情緒を満喫できた二泊三日のラスト・ドライブであった。

☆

井上石動

山梨

甘藍を剥くや玉ちる朝の露

ひなげしの不揃ふ揺れや少年期

潮騒へ網干す宿や蚊遣香

花栗や間なしの雨の熄みたるらし

三四人帰って行くや青田道

霧切れてにはか日光黄菅かな

ひぐらしのかぼそく鳴いて明けにけり

おしゃべり

大日向幸江

埼玉

飛びなれて人に寄り添ふ夏の蝶

紫陽花の雨呼ぶ顔を持ってをり

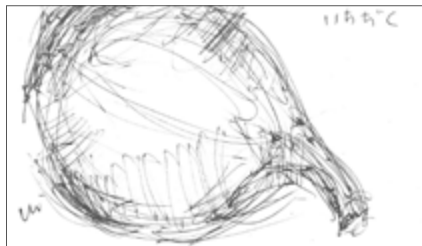
ソーダー水おしゃべりな泡立ててをり

足元に雲のごとくに梅雨茸

入道雲高からず出で水平線

隣家との垣根を越へて蛇イチゴ

はまゆふの照る日曇る日江に添ひ



滝瓢水【たき・ひょうすい】さん
78歳で没。10歳のとき、芭蕉さん没。
現・加古川市の富裕な船問屋の生家を、
祖父と母の溺愛のもと、その風狂奇行放
蕩蕩尽にて一人で破産させる。学問も積
んだが、芭蕉さん気取りの旅から旅へ。
されど「お大尽旅」。金が不足すれば実
家から湯水のごとく届く生活。息子も道
楽の限りに、恨みごとといわず、甘やか
し続けた母が没したときは、空っぽの蔵
がたった一つ残るだけであつたと。時に
50歳。あわてて帰郷も、葬儀はすでに済
み、親戚一同の冷視のなか、墓前にひざ
まづく。その後も、金はなくとも、従前
の風狂生活を死守したとか。こういう生
涯の人ですので、次の句群が、ポーズで
はなく、本心から出てきた感興と、私に
は思えるのです。

手に取るなやはり野におかれんげ草
浜までは海女も養着る時雨かな
さればとて石に布団は着せられず
蔵売つて日当たりのよき牡丹かな
ほろほろと雨そふ須磨の蚊遣かな
(参考) 霜の鶴土にふとも被されず
其角
親も子も同じふとんや別れ霜
秋色

☆

齊藤 裕子
東京

今日こそと芽に急かされて薙漬く
路地裏の若葉ばつさり切られけり
散る花を葉にとどめをり京鹿子
尼僧めく頭に触れてみる姫女苑
恵みの川怒濤となりて軽舁の子に
見失ひ離れて眺む実梅かな
寄りてまた見失ひけり実梅もぎ

☆

芝宮須磨子
東京

白椿そのまま落ちて清楚なり
退社時の人に交ざりて大夕立
植込みに陽射しの順に大紫躑躅^{オオムラサキ}
眞夏日や甲州辯が朝ドラに
参道に咲きほこるかに四葩かな
白塚にタンポポ根付き咲きほこり
テレビにも声をかけあひ梅雨晴れ間

古川の軽鴨の子を見るのが楽し
だった。梅雨の走りの激しい俄雨
が一日何回も降った次の日、軽鴨の子
を捜して、幾つかの橋の上から見て
廻った。五羽の少し大きめの子鴨と
親鳥は見つけたが、いつも見ていた
九羽の軽鴨には一向に出会えなかつ
た。

新古川橋の上から双眼鏡で捜して
いると、同じように双眼鏡を覗いて
いた男の人が、「あの九羽の雛は昨
日の大雨で流されたよ。もう少し大
きくなっていたら助かったかも知れ
ない。」と教えてくれた。力が抜け
てしまった。水嵩が増す前にどうに
か助ける方法はなかったのかと悔や
まれて仕方がなかった。

自然の力の前に、自分の無力さを
思い知らされた悲しい出来事だつ
た。



☆

篠田 純子

東京

梅雨の傘歌舞伎座前に救急車

黴の香やメートル螺子とインチ螺子

死角から又死角へと青葉の夜

白鷺の深みへ行くを見詰めをり

白緋着たるをとこの背に色気

三味線の兵隊稽古日雷

立膝で納豆かつ込む朝曇り

青ぶだう

定梶じよう

石川

昼がほのさうかもといふ開きやう

ででむしの雲をめざせるその途中

列長き蟻一匹がよそ見せる

按ずるに父は入りむこ麦こがし

走り梅雨豚が運搬されてゆく

運勢やけさも吉なる黴の日々

大流星群の夜が明け青葡萄

山王祭

私の生まれ育った所は日本橋茅場町で産土神は山王日枝神社だ。茅場町には日枝神社の御旅所があり、またお薬師さんもある。この辺りに宝井其角が住んでいたらしい。

今年の六月十五日は山王祭の本祭り、十三日に赤坂の本社から鳳輦の御巡幸があり京橋で見物した。雨上がりで日差しが強く、宮司や神馬、巫女達もかなり暑そうだ。裃姿の氏子の笠に挿した藤の花房に風情を見た。小学生も山車を引き盛り上げる。

私の子供の頃、山車を引くと、途中果物屋さんの所で西瓜を振舞われ料理屋の前ではジュースを戴いた。沢山お菓子の入った袋を貰い幸せな思いをした。今でも祭りは大好きだ。

突っかける鼻緒もどかし祭笛

四月号の作品評で茂登子さんが、拙句「網金の餅のふくれつ面愛す」をとりあげて下さった。「網金」のことばに疑問を持たれたようだ。

私の意識中では、フェンスに張るものを「金網」、餅や魚を焼くものを「網金」。焼き網・餅網ともいう。従って、金網を買ってこいと言ったら何メートル買おうか、と問われるだろうし網金を買ってこいと言われる人は必ず焼き網を買って来よう。

このことは実は、嘗てある方に講釈されて知ったことで方言ではないと思うのだが、茂登子さんがご存知ないとしたら或いは方言に関することなのかもしれない。

「竹竿」「竿竹」も似たような関係と思われるが、この二語はどんな辞書にも出てくる。しかし「網金」は出てこない。辞書を信ずれば「網金」ということばはない、ということになるのだが。

夏に入る

須賀敏子

埼玉

郭公の一声ありて足軽く

散りてなほ五葉躑躅の白さかな

松蟬が爆発的に鳴き始め

古戦場越えて行き着く菖蒲園

右足の小指骨折夏に入る

母親の大会の後雷雨あり

ブルーベリーネット外せばヒヨの来る

走り茶

田中藤穂

東京

走り茶を淹るといふに帰りけり

さびしめば米搗き虫の訪るる

部屋部屋にあぢさみを活け雨をきく

電車よりニコライ堂見え青葉見え

老ひとり磨崖佛背に田を植うる

牛蛙黄泉平坂入口に

をみならの服晴れやかに梅雨句会

前号正誤

咲き増ゆる定家葛の香が闇に



見沼代親水公園のせせらぎの傍で
お握りを食べていると急に雷がなっ
てバラバラと雨が降ってきた。慌て
て駅へ戻り二駅手前の舎人公園に降
りるともう晴れてきた。雨後で人も
少ない。四阿の屋根の下で腰をかけ
ると廻りは正に万緑、池を渡ってく
る風が気持ちよい。

目の下の池の浅い泥の上に鷗が一
羽人を恐れる様子もなくあそんでい
る。アメリカ人のまだ若い夫人が二
人、キリスト教の布教をしているら
しく暫らく話しかけられる。

静かに耳を澄ませたら遠い地の底
から聞こえるよつな牛蛙の声がす
る。私はこの所計報だの重態の報に
たて続け接していたので牛蛙の声が
何か物悲しく、あの世からの声の様
な気がしてじっとときき入っていた。

原發は勝手口出て若葉越し 佐藤喜孝

悪役は祖父が一手に山かがし 田中藤穂

出入良き郵便局や燕来る 長崎桂子

ふる里の空は群青蜷さがす 森理和

若葉風後に先にと犬とわれ 山莊慶子

まなこゐの先で恋猫かまへたる 吉弘恭子

珈琲を炒ってゐますよ青葉雨 井上石動

心太少し残せり寂しくも 大日向幸江

青春の日にありしごと苺食ぶ 木村茂登子

見霽かす新緑の海風渡る 斉藤裕子

あを梅や孫のカノジョは美形らし 篠田純子

艫を押せば水尾がのどけし蹤いてくる 定梶じょう

山羊のゐる駅で花見の終はりけり 須賀敏子

喜孝抄



七月作品より

篠田純子・佐藤喜孝

まん中といひはつてあるチューリップ 佐藤 喜孝

まん中に居たいのは人間、女性、と鑑賞した。AKB48のセンター、女子会の上座、舞踊の発表会に、誰が舞台のまん中になるのかの決定³⁶。常に無礼講とはいかない。だが、心のなかでは「せめて一生に一回はまん中になりたい」と思う人。もしくは「いつも私がまん中に決まってるでしょう」と周りを睥睨している人。この句に依る想像は尽きない。(純子)

悪役は祖父が一手に山かがし

田中 藤穂

祖父を嫌ってゐるといふ事ではなささう。尊敬に似た感情かもしれない。家系の中で抜きんでて个性的であられたのであらう。肉親をかう

詠むには深い人生の洞察眼が必要。(喜孝)

訃報欄になつかしき人朴の花

田中 藤穂

わたしはふと思ひ出す人が生存なされてゐるのか、もうお亡くなりになられたのか判然としないことが間々ある。懐かしい人の名を訃報欄で見つけるとは……。淡々と詠まれてゐるが立ち止まってしまふ句。朴の花がその人の清純さ気高さをうかがはせる。(喜孝)

修験者の列に法螺貝山すみれ

森 理和

作者は登山に行かれたのでしょうか。山岳信仰の修験者の列に出会います。春の深山幽谷に飮する法螺貝の音に、心を洗われ清々しい気持ちになった作者の顔が見えてきます。(純子)

ふる里の空は群青蜷さがす

森 理和

故郷に希求するものはそれぞれであらうが、贅沢にも万人が思ふことは子供の頃と変はらぬ自然であらう。群青の空は強い願望。その下で幼なじみの蜷を心弾ませてさがす。と読むか、蜷は探さなければならぬほど少なくなつてゐた。と読むか迷つたが後者にした。自分はもとより世の中も目まぐるしく変はるのに古里は子供の頃のままであつて欲しいといふ身勝手。で心のふるさととは不変である。「烏賊釣舟薄紫に水平線」の色彩も群青とともに魅力的な色彩に仕上がつてゐる。(喜孝)

若葉風後に先にと犬と我

山莊 慶子

犬と戯れながら散歩している作者が、とても若々しく感じられます。先を行く犬に「早く!」といざなわれ「よーし!」と追い越す作者。季

心太少し残せり寂しくも

大日向幸江

心太を少し残された方は体調不良の方であらうか。いつもなら好きな心太あつと言ふ間に食べ終へるものを、今は残されてしまった。他者であつても自己であつてもはなかく寂しいことである。(喜孝)

青春の日にありしごと母食ふ

木村茂登子

体のどこかを押すと不思議とある既視感に襲はれることがある。この句は母がスイッチを入れたのであらう。わたしにはこのスイッチはあるのだらうか?(喜孝)

見つけては数ふ軽鳧の子あさにけに 斉藤 裕子

作者は近所の川で見つけたかろがもに、心を奪われてしまったようです。あさにけには「朝に日に」と表記される万葉からの語彙のようです。今より情報の少ない時代、朝に日に心を奪われる事はきつと「恋」だったと思われます。作者は軽嶋の子供達に恋心と母性本能を感じたようです。鴉に食べられたのでは？迷子になったかしら？と、軽嶋の子を見る度に、数を数えている作者の必死さと愛情を、感じる句だと思いました。(純子)

見霽かす新緑の海風渡る

齊藤 裕子

高見で俯瞰してゐる感がある。「摩天楼より新緑がパセリほど」と対極をなすおほらかで爽快な出来映えの作品である。(喜孝)

艫を押せば水尾がのどけし蹤いてくる 定梶じょう

船の進むにつれて水尾が広がる。漕ぐといはず

「艫を押せば」がわたしに新鮮。読者は船に同乗してゐる感覚になる。「押せば港がサー近くなる」は能登舟漕唄の一節とある。「蹤いてくる」に作者のリラックスした気分が伝はる。スクリーンで進む船とは違い趣がある。(喜孝)

絶巔の石青春の証なる

阿部 寒林

わが触るる駒草岩稜までつづく

特別寄稿を頂いた。『絶巔の石』は今も絶巔に確とある。作者が念ずればいつでもどこでも手元に下りてくる。様々な思ひをつれて。両句とも山岳愛好家のいつまでも山を愛する心で溢れてゐる。

わたしは山歩きをしてゐたころ山頂で小石を拾って登頂日と山名を書いて娛しんでゐた。あの石ころたちは今どこにあるのだらう。(喜孝)

あをキーワード俳句辞典 (くっくき)

空転

空転につく暗転や地球寒し

竹内 弘子

空白

エンディングノートまだ空白のまま晩夏

木村茂登子

空腹

少年はいつも空腹合飲の花

篠田 純子

空也

さはやかや空也の杖に鹿の角
秋霖や空也の像のひすいの目

篠田 純子
篠田 純子

空中

アンカレッジ白夜乗継ぐ旧空路

木村茂登子

久遠

卒業歌久遠の理想疑はず
久遠寺や善男善女糸桜

篠田 純子
須賀 敏子

句会

ひと電車早めて行かむ初句会
父の日は句会があると断りぬ

芝 尚子
堀内 一郎

茎

昼間より明るき区画夜学校

長崎 桂子

区画

句会の子元気に一年生

須賀 敏子

初句会われ天とせり「はい寿子」

森 理和

三々五々虚子忌日和の句会かな

鎌倉喜久恵

水辺亭句会の果ての氷あずき

芝宮須磨子

虚子庵に句会あるらし半夏生

赤座 典子

句会の子元気に一年生

須賀 敏子

百合の茎伸びてむなしき一臥床

渡邊 友七

青空や茎生々と曼珠沙華

須賀 敏子

葦の茎懸垂のまま蜻蛉発つ

森 理和

金盞花茎ふとぶとと海辺の地

田中 藤穂

柵を抜け出で蓼の茎のいろ

吉弘 恭子

茎漬の累代の石てらてらす

定梶じょう

ジュリアンの茎の確かさぱきと摘む

齊藤 裕子

わが敬愛する俳人たち

―百日紅乙女の一身またたく間に 草田男―

阿部寒林



中村草田男

はじめて『萬緑』の句会に出たのは昭和二十四年頃かと思う。場所は草田男先生宅であった。先生は当時成蹊学園の高校教師で後に大学の教授となった。現在は学園に句碑が建てられている。

先生宅の句会は当時の住宅難を反映して学園の古い木造の寄宿舎のような二階の一室でこの広い部屋が先生ご一家の自宅でもあったのだ。当時は句会場を確保するのに困難な時代だったのである。参加者も十名位であったと思う。

先生一家も暫定的にこの建物の一室を学園から借用していたのだと思う。句碑の句はこの時のことを詠まれた句である。

空は太初の青さ妻より林檎うく

る。

天の瑠璃深く猪割かれをり

寒林

講評では「ふかく」は天にも猪にも解されるが、こういう二股を掛ける手法は短詩型の俳句では許される。読者は自分の思うように解せればよいと評せられたのを覚えている。そして先生は又、

暖炉に笑ふ客に悲劇を観せて来て 寒林

この拙句を採り上げたことがあった。この句解を参加者の同人が「観客」に観せて来てと解説して採り上げたので先生は客を「接客と解して「観せて来て」の「観」は観客でなく「観劇と解すべきであると強調された。もちろん私も其の通りの句作であった。当時暖炉やストーブなど劇場にはなく、恐らく火鉢の利用が多かった筈である。

以上の拙句に関してのことは少しは勉強になると思い書き足した次第である。そして先

この広い畳の部屋での句会の記憶は割合鮮明に浮んでくる。それから数ヶ月後、それ程遠くない井の頭公園内の茶店であったり、浜離宮、或は後樂園とそのつど場所が変更したのは当時の事情としてこの俳句会でも同様な事情であった。参加者の中で記憶にある人々は、松原地蔵尊、岡田海市、福田蓼汀、北野民夫、その他一人くらい女性が見えたと思う。特に萬緑句会では女性の参加は少なかった。先生の句風に戦後は蹤いて行けなくなった事にもよる。句集で言えば『來し方行方』（昭和22年）以後となる。

校塔に鳩多き日や卒業す

長子

萬緑の中や吾子の齒生え初むる

火の鳥

すつくと狐すつくと狐日に並ぶ

來し方行方

その後『銀河依然』『母郷行』『美田』『時期』となる。先生が句会での講評の時に偶々私の句を何回か採り上げて呉れたことがあ

生の眼は確かで後日この拙句は「天狼」（昭和二十五年五月号）の巻頭を獲得することが出来たのである。誓子選の巻頭まで私は実に三年もかかった事になる。

『萬緑』の草田男選に津から投句の木枯さんは『天狼』の上位陣の実績を生かし或程度の成績を示していたが私と同様、天狼専念のために『萬緑』を遠ざかつてしまった。その後草田男先生が大学教授となられた頃は杉並区松庵に移られていた。松庵を私と兄英雄（萬緑同人）と二人で訪問が出来たのは相当な歳月が経ってからであった。記憶は確かとは言えないが先生の最晩年に近いことは確かで恐らく昭和五十五年か六年頃の夏であったことは確かである。この間たった一度だけお会いした事がある。それは共に高島茂さんの「ボルガ」の帰りかも知れない、新宿駅から中央線での車中であるが先生の方で私を見掛けて声を掛けながら寄って来られた。車中で知人に会うこと

など殆どない事なので少し驚いた。先生は人が思う程近寄り難い性格の方ではなく、非常に親しみ易い方なのである。人によるかも知れないがこの車中でも吊草談義で先生のお話の方が多かった。あつという間にわたしの下車駅阿佐ヶ谷へ。先生は二つ先の西荻窪駅である。この時、先生の方から気さくに声を掛けてくれなかったらそのまま知らずに終わり、その後先生宅訪問までお会いする機会はなかったことになる。

最晩年に入った先生は快く私たち兄弟を迎えていただいた。ご自身は浴衣姿であった。それが少し淋しく思えたのはやはり最愛の奥様を失った影響を隠せない御姿だったからであろうか。奥様の死は句集で言えば『母郷行』（昭和31年）以後のこと。敬虔な基督教徒であった奥様が高野山で急病となり死去されたのである。その時の先生にとってはこれ程ご不幸の大なるはなかったのである。

妻ニタ夜あらずニタ夜の天の川

吾妻かの三日月程の吾子胎すか

父となりしか蜥蜴とともに立ち止る

妻抱かな春昼の砂利踏みて帰る

愛妻俳句の好見本ではないか。

「三日月ほど」の吾子がいまは立派な娘さんになって老父草田男先生の身の回りの世話を引き受けておられ雑談の私達の席によく冷えた麦茶と水羊羹を置いて丁寧に挨拶をされたのが印象的であった。雑談中先生は私に「誓子さんは意外に静かな人ですネ、むしろ寡黙家ですネ」と言われたので、「先生、誓子先生は以前から耳の治療に大阪の病院へ通院されていた。草田男、誓子両先生は月に何回か朝日俳壇の選句場でお会いしているからである。

草田男俳句は俳壇では難解俳句の代表とされ、同時に人間探求派とも謂われ得意な存在であった。又社会・思想・宗教性など自在に

俳句として消化される手法は他の俳人の真似は不可能であった。私たちの雑談は二時間余にも及び、これが先生との今生の別れとは夢にも思っていないかった。

草田男俳句が異常に変貌したのは昭和五十六、七年頃か。いまもよく分からないが萬緑誌上にての発表作を見てそう感じたのである。創刊同人の塙毅比古氏が私たち会社の嘱託であったので或日「最近号での先生の作品は難解どころではなく意味不明のような句がありますネ」と訊いたところ塙氏は「そうですヨ。そのことで近く編集会議をひらくことにしております」とのこと。次号あたりから草田男俳句はガラリと一変、平凡すぎる程の句風となっていた。前記の塙氏に問うと「編集会議の提案で先生の未発表作品の中から撰別して無難な句を掲載することにした」との話であった。あれ程精気の溢れる先生の句は病と共に接することが出来なくなったのは残念であり且つ淋しいことであった。



勿忘草日本の恋は黙って死ぬ
菜の花日和母居しことが母の恩
ほととぎす敵は必ず斬るべきもの

これらの句は先生最後の句集となった『時機』第八句集に収録されているが少しも衰えを感じさせない句風に驚く。昭和五十八年の夏、前記の塙氏が先生死去の模様を涙ながらに話してくれた。

「先生ご臨終の時に洗礼をうけられました」と。新聞は「昭和の芭蕉逝く」と報じた。

真先かけて聖母に祈る晩涼ぞ

毎月25日発売
定価1000円(税込)

俳句界

月刊 2014年 9月号

特集
**再検証
大正俳句の格調**

対談
佐高信の甘口でコンニチハ！
三上智恵（映画監督）

魅惑の俳人
森澄雄

私の一冊
辻田克巳「幡」

作品
松本可南 中村和弘 佐藤麻績

新幹線で行く東海道吟行
東海道新幹線開業50周年
○エッセイ・私と新幹線
平山雄一 林 義勝 鳥井保和
○作品8句・エッセイ・おすすめ駅弁
東京 鳥居真里子／新横浜 鹿又英一／新富士 甲斐遊糸／静岡 米山潤三／浜松 九鬼あき多／名古屋 島津余史衣／米原 田島和生／京都 名村早智子／新大阪 高橋将夫

おとなのエッセイ
湯川れい子 谷村志穂 他

※セレクション結社「秋」
佐怒賀正美

グラフィック
俳句界NOW 橋本榮治

再検証
大正俳句の格調
○大正俳句とその格調の魅力 宮坂静生
○格調高き大正俳句ベスト30 小島 健
○私の好きな大正俳句
鈴木呂仁 正岡明 西池冬扇 大関靖博
川越歌澄 石島岳 涼野海音 竹内克也

※一部変更の可能性があります。

株式会社 文学の森

お求めは… ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2 田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

自詠自読

白魚を食むひとときを黙しけり

桂子

入院した隣人を御見舞に、同じ町内の方と名古屋の病院へ出掛けました。

お見舞いを終へて大分遅い昼食に立ち寄ったお店で「旬の膳」と言うメニューがあり「今日は何ですか」とお尋ねしたら「白魚です」とおっしゃった。皆が早速その膳をお願いしました。

入院してらっしゃる方のお話をお聞きした後なので、それぞれの心に重い気持ちがありました。卓に着いてからも小声で話しており、お膳が運ばれて、美味しそうな匂いと清清しい色合いの盛付けに、会話は途絶え皆は黙って旬の白魚をゆっくりと味わいました。

白魚のお料理は三種か四種あったと思いますが、今もお吸物と卵とじの味が記憶の中に残って居ります。

三月や焼跡の修羅父と行き
三月やはらから探し修羅の跡

須磨子

其の頃私は深川万年町郵便局に勤務しておりました。従姉の連れ合いが深川海辺長郵便局の局長をしておりまして、従姉の家に住んで万年町へ通っていました。なんとなく実家の中野へ帰った時にあの空襲がありました。

中野から見ても下町の空は真赤に見えておりました。十一日出勤の為飯田橋駅まで行つて見ると避難する人達が、どんどんつづいてきていました。其の人達に聞くと深川へはともに行けませんと云われました。わたしは持っていた弁当を弁当箱ごと渡して中野に戻りました。

今と違って情報はラジオだけが頼りでさっぱり詳しいことがわかりません。明くる日、おにぎりを持って父と二人で従姉達を探しに行きました。その前に勤務先の万年町へ寄りましたが町そのものが何もなくなり局長一家の消息は得られませんでした。途中消防士が消防車のハンドルを握ったまま死んでいるのに出会いました。他日局長一家は深川第一小学校の講堂に逃げて助かったとわかりましたが、その時には講堂に入りたくても入れなかった人達が講堂に入りたいたいと言う形で死んでおりました。交通機関が全滅したので、それから歩いて平井町まで行くことにしましたが、途中同僚の家に寄りました。その町も全滅で何もない焼跡でした。同僚の家のあった場所で焚き火をしている人がいたので、同僚のことを聞いて見ると、これがそうですと告げられて息をのみました。川に逃げて溺れ死んだので今焼いているのだとのことでした。まさに地獄でした。それから歩いて海辺町郵便局の従姉達をさがしました

が、街は焼跡で消息は得られませんでした。後で聞いたところでは従姉は子供を背負い局員と避難したそうです。が途中子供を降ろしてお乳を飲ませて、オムツを取り替えるからと言って局員を先に行かせたそうです。が、行方知れずになってしまいました。焼跡整理で屍体となって一ヶ所に集められて集合墓所に葬られていて名簿の中に発見されました。一緒に避難した局員も大怪我をして倒れているところを助けられたそうです。それから歩いて錦糸町駅まで行く途中の道の端に腰掛けておにぎりを食べることにしたら父が後ろを見ると言いました。そこは死体収容場所でした。錦糸町駅から線路伝いに姉の嫁ぎ先の平井町まで行きましたら、姉の家は焼け残っておりまして。小松川の土手にはりついて助かって兄のお母さんの実家を頼って埼玉に避難しておりました。一週間位して従姉の連れ合いは憔悴しきった姿で中野の私達の家に来ました。話をするのも辛い有様でした。

あの阿修羅には二度と会いたくないとつくづくおもいます。あつちこつちで世界はくすぐつていますが、巻き込まれる事のない様にと願っております。

発車ベルホロロホールル春隣

茂登子

この句を示されて、あゝこんな句を詠んだこともあつたと思ひ出した句です。

どこの駅であつたか駅名も思ひ出せない旅先の一日に僅かしか発着しない小さな駅の印象である。

時刻が迫っておりもう車両が見えたので、改札から向う側のホームまで階段を上つたり下つたり、やつとたどりついた時、ホロロホールルと明るくのんびりしたメロデーを奏でたのである。『さあさお早くお乗りください』と優しく促す様な響きであつた。

ガラガラな車内の窓側の席を一人占めてかすかに春の兆しを見せている田園風景を心ゆくまで楽し

た。句会で出句する時、少し躊躇いもあつた。しかしだからこそ出句した。その時、下五は「芋を剥く」だつた。披講の時、喜孝さんと純子さんが選んで下さつてホツとした。講評では俳句ではあまり好ましくない題材だ、下五の「芋を剥く」がリアル過ぎるから違う季語にした方がいい、等々批判的な評も多くあつたように記憶している。いろんな見方があるんだなと感じた句会だつた。

持ち帰つた句を「あを」に投稿するまで色々考えた。題材として好ましくないと評されても、私の中ではやはり捨て難い句だつた。しかし、下五については、何かもつと良い季語はないかと考えていた。そんなある朝、二階のベランダで洗濯物を干していた私は、庭の梅の木にほころび始めた一輪の梅の花を見つけた。すぐに、これだと思つた。

下五を「梅一輪」と改めて、この句を「あを」に投稿した。駆出しの私にとつては、大切な挑戦の句であつたといまでも思っている。

む耳にいつまでも残っている様なメロデーであつた。

赤子産む夢覚めし朝梅一輪

裕子

純子さんに誘われて、私は二〇〇四年五月に傳句会に参加し、俳句を始めた。俳句は五七五でできている、季語を入れる、その程度の知識しかなかった。句会に参加し、講評して戴く中で俳句を一から学ばせて貰つた。いつも自分の句の評をドキドキしながら聞いていた。誉められる時もあれば、捨てた方がいいと酷評を戴く時もあつた。句を作つても自分では良いも悪いも分からなかつた。迷う句ほど教えて戴きたくて、酷評を覚悟して出句した。

この句は俳句を始めて十ヶ月位の時に作つた句である。冬の朝、味噌汁の具に里芋の皮を剥いていた。朝方見た夢を思ひ出していた。毎日の事を題材にして、とにかく俳句にしてみる。迷わず私は俳句にし

記念樹にVサインせり卒業生

幸江

少し前までカメラのレンズにピースサインをしていた。若くもない私や友人達が指を二本立てVサインだ。私の心の中にある風景は、桜の木とその前で卒業記念写真だ。同じスカート丈・三つ編みの髪の毛校則通りの学生時代、その時代にはVサインはなかった。

小母さんさんになった今、心おきなくピースサインをして退屈だつた学生時代を懐かしむ。

無一物なりし戦後よところてん

藤穂

『あを』の六月号で、喜孝さんが戦争の頃に食べた藜を恭子さんにお浸しにしてみらつて食べたらず味かつたと書いていらしたのが、面白くほほえましかつた。喜孝さんにもそんな経験があつたのですね。戦中から戦後の食糧難の頃、食べられるものは何

でも食べました。さつま芋の蔓はえぐみがあって固かった。南瓜の蔓の先の方や花はくせがなくて柔くて割合おいしかった。でも私は後年南瓜の蔓を食べてみたが全然おいしくなかった。お米に配給のフスマを混ぜて炊いた御飯はまずくて、中学生の弟はみな茶碗の端にフスマを出して残してしまつて、結果栄養失調で倒れた。今、辞書をひくとフスマは牛馬の飼料と書いてある。

あの頃は空襲の焼跡がそこら中であつたので、みな南瓜や落花生、じゃが芋、さつま芋、不斷草など素人でも作りやすいものを育てて食料の足しにしたが、肥料もろくにないのでおいしいものは出来なかった。

私が結婚して田端に來た頃、舅に、近所の空地に藜が生えているから抓んでこいと言われた。姑と私は仕方なく箆を持つてつみに行った。茹でてお浸しにして食べて割合おいしかったような記憶があるが今食べたらずっぱりまずいかも知れない。おしん

ぢやないが大根飯もたべたし、甘味はズルチン・サツカリン。芋汁粉などというものが店で売られたりもした。配給になつたホッケが腐りかけていて嫌な匂いがしてどうにも食べられなかった。今でもホッケを見るとその匂いがよみがえつて、ホッケだけは好きになれない。

知り合いの人がヤミルートで手に入れた馬肉を新聞紙に包んで、夜陰にまぎれて持つてきてくれたことがあつた。父も母も正直な人だったので、そういう時はお互いに小声で、目と目でお礼を伝えたりしていた。

戦争の頃のことを書き出すと筆がとまらない。あれから七十年、今の日本はお金さえあれば世界中の食べ物を手に入れる事が出来るし、牛乳でも豆腐でも、何日も腐らない。でも納豆でも遺伝子組換えがどうのこうのと実に煩雑で、私はもつと素直な世の中に暮したいと思つてしまう。今後の世界は果たして良くなるのでしょうか、悪くなるのでしょうか。

ちなみに山本健吉編（文芸春秋刊）の歳時記には「藜（夏）は田野に生じ、畑に蔬菜としても栽培される。初夏の頃緑黄色の細かい花を枝上に穂をなしてつける。若葉を摘んで茹でて浸しものとして食べる。」とあります。

藜の杖は昔から軽いので老人に喜ばれたようです。今度どこかで見付けたら、一本喜孝さんに進呈したいと思います。

聖五月火鉢の灰を洗ひ干す

東亜未

十一月から四月までの炉の時期が終ると茶道では風炉の準備をします。何より大変なのは道具の入替より、風炉灰の準備です。風炉灰は去年のうちに何回も篩でふるつてあります。もう一度ふるい、炉の時期の灰や火鉢の灰は洗つて上澄みを捨て埃やゴミを流します。そのことを「聖」という表現にして、自分を励ましていました。今やマンション等での稽

古は炭型電熱器を使います。「聖」から遠くなりました。

相州の富士へかむさる卯浪かな

石動

「表日本・裏日本」の表現は、最近自粛されているみたいですが、「表富士・裏富士」は、どうでしょうか？何かにつけて、静岡の富士が前面に出る様ですが、これらみな「素人！」の見方。その流麗優美なる姿、甲斐に勝れる…とは、私が言う言葉ですが、甲斐からの富士、もつと言つと私の住む「郡内地域」から見る富士こそ一番。

世界遺産になつてバンザイバンザイと両県では大はしゃぎですが「自然遺産」で登録はできなかった。山梨の場合（静岡民に遠慮して）は、皆で、さんざ富士を痛みつけています。登録後も、受け入れ等々、何らできていません。何から何まで、後手後手です。オホヤマツミやコノハナサクヤビメの怒りが現れま

せぬよう。

この句は、想像句。神奈川沖波裏の、あの舟に乗っている客の一人として想像しました。

走り梅雨原子爆弾拾つて

恭子

何時作った句なのかと忘れていた。雑な性格のせいか原稿依頼が来て、えーっ私が作ったの？と同じ手帳を十年以上使っている。娘が結婚記念日にくれたものだ。手帳を繰ってしらべた。原子爆弾は実際には見たことがない。と言うと笑われそうだが日本人で見たことがある人がいるの？そんな思いでいるとき、敗戦記念日（戦争に負けて記念日とは）のテレビに映し出されたものに目をつぶってしまいたい、凝視せざるをえなかった画面があった。昭和十六年生まれそれもあまり戦争の実感のわからない田舎に疎開していた身にはこの時ばかりは瞼を閉じるのを忘れていた。

を作っている一団があるくらい。

そもそも能登には高い山があるわけではない広い山地もない。熊はいないしほんの数年前までは猪もいなかった。狐も、山兎駆除のために放されて増えてきたけれど、全くの素手で入っても何の心配もないのが能登の山中でした。

温暖化の影響だそうですが、つい先日半島の先端で仕掛けた箱わなに猪が掛かったニュースがありました。熊が入ってくるのも時間の問題とされていて、何とも怖いことになってきている。

さて掲句の罨。往時を追懐してできた句で、兎罨のこと。

針金でつくって実に簡単。その先に小さな小さな輪っかをつくり、1mほどの長さに切った側をその輪の中に通すだけ。

兎の通り道（兎はほぼ同じ道を毎夜歩く、と先輩から教わっている）の藪の木の幹なんぞにくくりつけて、兎の頭が通るほどの輪をつくっておく。うま

可愛い（焼け焦げた服を身につけていた）女の子が前屈みになって地に手を突いた格好で亡くなっていた。なんで前かがみなんだろうと、私の頭を何かが通過した……………

もしかしたら爆弾が落ちるのが判って拾って、投げ返そうとしたのかも……………私の六感がかんじたのかも。

こんな句と思いながら当時は発表したかったのかも知れない。今より少しばかり若かった、考えも。今ならどうか、この文章が本に載るまで考えがまとまりそうにないと思いながら……………

罨かけて来たり返り見山眠る

じょう

むかしは「秘境能登への旅」なんて広告宣伝が掲載されていたりして、子供ごろに腹立たしく思っただけでしたが、今はそういうことはない。ただ自虐的に「秘境の能登に住む」なんて言いまわしの句

くいけばその中にかかってくれる、というわけ。むごいようですが私達は害獣としてしか見ていなかったようで、しつ尾を持ってゆけば森林組合から賞金も貰えたのです。

今はもう誰も兎をとることをしませんから、結局狐を放つということになる。

冬期に罨を掛けたのは、肉が美味の時期、ということもあるのですが、積雪でその足跡が読めた、ということの方が大きい。なにしろ先輩の教え通りにするのが当時のならいでした。

山兎が毎夜同じ道を通ることはあり得ない、と知ったのはずっと後年。



桃の花之巻

二〇一四年二月二五〜二〇一四年六月十九日

1	桃の花水くねくねとしてをりぬ	佐藤竹洗	19	曖昧な空の端より雲雀落ち	石
2	のたりのったり舞ふ春の鳶	井上石動	20	夢の中にて土竜の一世	竹
3	永き日の昔話を聞かせぬて	吉弘音々	21	迷ひ出し浅草寺裏灯のともる	石
4	疊の広さ埋むる風音		22	売れ残りたる棒手振りの魚	竹
5	竹の葉のかへす光も後の月		23	冬ざれの軒端に垂るる麻の紐	石
6	秋蚕仕舞ひて日々のゆるりと		24	すずめの撒き餌寒鴉下り来る	竹
7	湯おもての泛かぶ頭に木の実降る		25	横山を上る朝日に願ひかけ	石
8	言葉すくなに鏡台の前		26	目をつむりては其処にある人	竹
9	結び文いろはに託す夕まぐれ		27	待ちがてに戻る逢坂歩を早め	石
10	箸もつけずに汁の冷めたる		28	琵琶の残り音木々を渡れる	竹
11	税率の末ひろ伸しにくだを巻き		29	中日和北都にほのと月あかり	石
12	犬の散歩の綱を長めに		30	おもひおもひにうづくまる鹿	竹
13	卯月波ひとつふたつとかぞへられ		31	近道とかぼちゃ畑を斜交に	竹
14	銀座女将はセルの嫦娥か		32	ギプスの裏の脛の痒かり	石
15	ひとひらのへりオトロップを胸内に		33	愛しきやしわぎへの径のなかなか	竹
16	けふも見らるゝ風待ちの舳		34	靄にあらはれ靄にかくるる	石
17	代参の石松怪し花の酔		35	あれこれや五十年ぶりを花の旅	竹
18	おふだを胸に茶摘唄聞く		36	新入生の声の朗らか	石

額あぢさゐ之巻

二〇一四年六月一〜二〇一四年七月二七日

1	澁刺と額あぢさゐの湿りをり	篠田不寝	19	伯刺西爾へ向ふ飛行機春の虹	不
2	甕の眼高の伸びやかに二尾	森 草	20	白く香りしコーヒーの花	草
3	夕陽背に面馴る道へ誘うて	吉弘音々	21	何はさて朝餉かつこみとびだせり	音
4	丘より望む遠き山々		22	助太刀にゆく渡部又兵衛	不
5	けふの月新たなしるべまっすぐに		23	合歓の花日々おだやかにすごしゐて	草
6	古酒をかたむけ留守居の椽で		24	ゆるりと扇かぜを送りし	音
7	故郷の野を踏み分けて露しとど		25	ふはふはと大きな雲の上にをり	草
8	駅のホームで右手のぬくみ		26	花嫁御寮の涙ひとすぢ	不
9	御守りのやうに一言また明日		27	ゆきかよふ暖簾の奥に心懸く	音
10	スマホの中の君を見てゐる		28	まぶたを上げて瞳とひとみ	草
11	彼を想ひ眺起きし北へ急ぐ		29	後の月裏の河岸より舟を出し	不
12	澄み渡る空深き稜線		30	杖をつきたる案山子の横を	音
13	雪原へ身を躍らせて滑り出し		31	西へ行く法師の道に残る蟲	不
14	炬燵で見上ぐ雲合ひの月		32	とほくちかくと三保の松原	音
15	胸を張り踵の高い赤い靴		33	雨上がり葉っぱの先の一滴	草
16	宙返りして歌舞伎の外連		34	朝日の光り悠久の時	不
17	一本の垂るる花に人の列		35	幾百の京の寺々花の舞ふ	音
18	ころもとなき足に蒲公英		36	朧の今宵宴はつづく	草

あとがき

『あを』の連句の楽しみ方は文音が主である。以前は中野坂上のジョナサンで昼食とドリンクバーで夕方まで粘って過ごした。また顔をそろへてワイワイしたものである。定楯じょうさんにもいろいろ助言を頂いてゐる。基本的には自由に、変化を尊ぶやう心がければとおもってゐるが、こちら初心者道を踏み外したら声をかけてください。

発句から四句目までは連句の本に書かれてゐる事には大差が無い。

月の定座は初折表五句目。初折裏八句目あたり、名残裏十一句目であるが、定座より前に前に出すことを「引き上げる」後に出すことを「こぼす」。どちらも可。発句が秋の時は三句目までにし出す。

春・秋は三句五句続ける。夏冬は二句。

「季移り」可。普通、季の間に「無季」をはさみ他の季につづる。直接、春の句に夏の句をつけることを「季移り」という。

「新年」の季語は現の暦通り「冬」の一部として扱う。

恋 初折裏に一ヶ所。名残裏に一ヶ所。発句が恋なら脇は必ず恋。二句続ける。

初折表は「するべからず」がいろいろあるが、個人的には宗教も固有名詞も構はないのではないかと思つてゐる。如何であらうか。(喜孝)

今年の暑さに恐れをなして吟行中止になつてしまつた。これからは異常ではなくこれが平常になるのだらう。(喜孝)

ご厚志多謝

田中藤穂様

二〇一四年八月号

発行日	八月九日
発行所	東京都中野区中央2・50・3
電話	090・9828・4244
ファックス	03・3371・4623

印刷・製本・レイアウト

カット／恩田秋夫・松村美智子 竹僊房

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

郵便振替 00130・655526(あを発行所)

乱丁・落丁お取替えます。